

永遠の命の希望説教②

詩編90編 1節～14節

【祈り。神の人モーセの詩。】主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から 世々とこしえに、あなたは神。あなたは人を塵に返し「人の子よ、帰れ」と仰せになります。千年といえども御目には 昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。あなたは眠りの中に人を漂わせ 朝が来れば、人は草のように移ろいます。朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい 夕べにははしおれ、枯れて行きます。あなたの怒りにわたしたちは絶え入り あなたの憤りに恐れます。あなたはわたしたちの罪を御前に 隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。わたしたちの生涯は御怒りに消え去り 人生はため息のように消え去ります。人生の年月は七十年程のもので。健やかな人が八十年を数えても得るところは労苦と災いにすぎません。瞬間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。御怒りの力を誰が知りえましょうか。あなたを畏れ敬うにつれて あなたの憤りをも知ることでしょう。生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができませんように。主よ、帰って来ててください。いつまで捨てておかれるのですか。あなたの僕らを力づけてください。朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ 生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。

コロサイの信徒への手紙 3章1節～4節

さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

1, 人生を振り返って

私たちの人生の世代には、大きく分けて幼年期、少年期、青年期、壮年期、老年期と、分かれています。小さな子供の頃は、これから始まっていく道のは果てしなく長く感じられ、大人になるのもずっと後だと思っておりました。毎日毎日が、とても長かったのを皆さんも覚えておられると思います。青年期には様々な葛藤や、他人と比べてコンプレックスを持ったり、どのような職を選ぶか、あるいは恋愛や結婚などで大いに悩んだと思います。しかしその時にも、まだ自分には非常に大きな可能性があり、遠い所まで飛んでいけるような翼があるような感じがしておりました。将来に向かって、不安と期待に胸を膨らませていたと思います。三十代を越えて、仕事も、家庭も持つようになると責任がのしかかります。社会的な責任。家庭での責任。そのような責任の中で少しずつ疲れ、また自分の能力がどの程度あるのか、ということもだんだんわかってきます。青年時代に持っていた可能性や夢も、実現できたと思うこともあれば、実現できそうにないと悟っていることもあります。これが今、わたしが経験している時代です。私が今感じているのは、人生の半分をちょうど過ぎたのだという感覚です。そして、このあと、何年教会に仕えることができるのか。そのためにどんな勉強をしなければならないのか。これまでさぼっていたことを痛感しつつ、少しでも知恵や知識を詰め込んでいきたいと思っております。

このあと、神様が許して下さるならばですが、50代、60代、70代、80代を経験することになると思います。その年齢にまだ達していない私がこの時代について何かを言う分際ではないかもしれませんが、このような壮年期から老年期にかけて、皆さんの歩みはどうであったでしょうか。

ある人がこのように語ります。この時代には、体の老化が徐々にでも進行し、そのさきにある死を意識せざるを得なくなる。しかし年を取ると、誰でも未知の死への不安を感じ、漠然と死について考えることはあってもそれ以上、死を考えることをやめてしまいがちである、と。また、この時代には若い頃の健康が失われ、社会的にも、家庭的にも、中心的な役割を果たすことから遠ざかる。それゆえに、寂しさが強く感じられるようになり、そこに神の恵みを見出すことが困難になるだろう、と。

このように語る人自身が、病弱な方であり、病氣と闘いながら、夫を支えつつ、常に御言葉を学び、強くない体を持ちつつも、一つの教会の伝道にたずさわっていた人でありました。晩年には長く病の床についていた方でありました。恐らく、若い頃から病氣と闘ってきた人でありましたので、その人生をかけて、年を取ること。病を患うこと。そして死ぬということを真剣に考えていた人であつたに違いないと思います。この人はこのように語ります。誰もが、自分の死を信仰者の立場から考えることが大事である。死について考えないまま、だんだんに死がその影を濃くして、ある日突然その威力に屈服するという死に方は殺されるのと同じだと言った神学者がいるが、そういう死に方をしないように、日ごろから死をめぐる聖書の使信を語り、これを聞いて死への備えをする必要があるのではないだろうか、と。若い頃から病を患い、死を見つめていた人であるからこそ言える、厳し

くも真理を突いた言葉であると思うのです。また、神の恵みを知る時、まさに死というわたしたちの終局をも、恐れることなく、絶望することなく、希望をもって見据えることが本当にできるのだとこの人は伝えたいのだと思います。

2. 人生を貫く神の恵み

さて、そのように人生の秋には、若い頃には与えられていたもの。健康や、やりがいのある仕事や、家族など、人生の核となるようなものが少しずつはぎ取られていくように感じる中で、何か神の恵みがわからなくなる。神の恵みを認められなくなる、そういう誘惑があるのではないのでしょうか。しかしそのような人生の終わりにさしかかる時代にこそ、神の恵みとは何かということをはっきりと受け止めて行きたいのです。イザヤ書の第 54 章 10 節にこのように語られます。

「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない」とあなたを憐れむ主は言われる。」

わたしたちの人生を貫く、決して変わらぬ慈しみがあるとイザヤは語るのです。私たちの人生には、浮き沈みがあります。良い時もあれば、悪い時もあります。しかしそのような人生の全てにおいて神の恵みは等しく注がれていると聖書は語るのです。

さきほど詩編の第 90 編を読んでいただきました。この詩人は、神が、人間がそこから始まり、そして地上の命を終えて、またそこに帰るべきところであると語ります。私たちの命の源であり、存在の根源。それが神である。そのような恵みの神を語りながら、しかしそれとは反対にも思えることをも伝えます。9 節にこのようがあります。「わたしたちの生涯は御怒りに消え去り 人生はため息のように消えうせます。」つまり、わたしたち人間が死ななければならないということの意味の確かな一つの理由として、そこには神の怒りがあるのだと、聖書はここで語っております。

私たちが死において不安や恐れを抱くのは、ただ死ぬときに痛みや苦しみがあるから、というだけではありません。痛みや苦しみが無いのならいつ死んでもいい、などという簡単な歩みをわたしたちはしておりません。わたしたちが死ななければならないような時が来た時、苦しいのは、まだやり残していることがある、という思いではないのでしょうか。あるいは遣された人々のことを想うからではないのでしょうか。そしてそれは、恐らく、90 歳になったとしても、100 歳を超えて長生きできたとしても、そういう思いから解放されることは難しいのではないのでしょうか。なぜなら、わたしたちはその人生の中で多くの罪を犯したからです。それは、責任を果たせなかったということ。為すべきことができなかつたということにおいてであります。社会に対する責任。隣人に対する責任。それらを満足に果たせなかつたという負い目をひとつも持たずに生きることのできる人はいないからです。そして、そのような思いを持っているという事実こそが、私たちがやがて、私たちを生かし、地上での歩みを歩ませてくださった主人に対して、その人生の会計報告を出さなければならない時があることを示しているのではないのでしょうか。(ルカ 16 章 2) いつか人生の総決算をしなければならない日が来る。そしてそれは死をもって逃げおおせるようなものではないということです。人生における責任とは、何よりも、わたしたちの主人である神に対して負っているのだということ。わたしたちが死を恐れる根本的な理由はそこにあるのかもしれない。ローマの信徒への手紙でパウロはこのように語ります「罪が支払う報酬は死です。」しかしそのあとすぐこのようにも語ります。「しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。」(ロマ 6 章 23)

つまり、私たちにとっての慰めは、主イエス・キリストが、わたしたちの全人生の責任を、ゴルゴダの十字架において確かに取ってくださったということにあります。私たちが受けなければならなかつた神の怒りを、あの日確かに代わりに主イエスが引き受けてくださったということです。そのことを信じて、主イエスによって罪を赦されたのだから、もはや神に、責任を問われることはないのだ、という安心。神様がもはやわたしたちを怒りの眼差しでは見てはおられないのだと言う確信が与えられるとき、死ぬということの意味が 180 度変わるので

す。罪の支払う報酬、神の怒りのゆえの死ではなく、わたしたちが罪人であることが終わるための死であります。なぜなら死んだらもう罪を犯すことはできませんから。そして、それは永遠の命の入り口なのです。イエス・キリストを信じる者の死は、死で人生が終わるのではなく、そこから、わたしたちの本当の始まりであるという、希望のしるしとなります。復活を信じる者にとって、墓の意味も変わるのです。そして、そこでこそ、ハイデルベルク信仰問答の第一問が私たちの心に響いてきます。「生きている時の、あなたのただ一つの慰めは、何ですか」「わたしが、身も魂も、生きている時も、死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実なる救い主イエス・キリストのものであることであります。」このハイデルベルク信仰問答の第一問は、また何度もこの主題説教の中で紹介するかもしれませんが、それほどにこの告白がわたしたちの信仰の要であるからです。そして、主イエス・キリストを通して罪の赦しと永遠の命を与えてくださった神御自身がここでも私たちに語りかけてくださっています。「人の子よ、帰れ」(詩編 90 編 3) わたしたちは、死の意味も分からずに突然、死の力に屈服して死ぬではありません。そうではなく、神がその深い愛でわたしたちをこの地上での歩みを終えさせようとする、明確な意志によって、ちょうど、決められた日に、神によって御許に呼ばれるのであります。そうであるならば、わたしたちは神が、帰れと言われるその日まで、この地上の命を手を抜かないで生きることを命じられているのです。そしてその後のことは全て、主にお任せすることが許されているのです。このように、十字架による罪の赦しが、とりもなおさず永遠の命を与えられるということであり、このような恵みが私たちの人生を貫いている。最後まで私たちはこの罪の赦しと永遠の命の中で生き、そして死ぬのです。それゆえに死を恐れずに、希望をもって人生を歩みぬく者とされたのであります。

3, 上にあるものを求めなさい

さきほど、新約聖書はコロサイの信徒への手紙の第3章1節から4節を読んでいただきました。もう一度、1節をお読みいたします。「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。」パウロは、全てキリストを信じて洗礼を受けた人々に、この認識をしっかりと持たなければならぬと語ります。私たちは、洗礼においてキリストと共に死んだのです。主イエスと共にあのゴルゴダの十字架で。洗礼とは、キリストの死に連なることであり、キリストと共に死んで、キリストと共に復活するということであります。洗礼によって私たちは新しくされました。地上にしながら、天に属する命を与えられたのです。だからこそ、パウロは私たちに告げます。「上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。」地上のものとは何でしょうか。この世にあって、わたしたちが肉体の命を生きる限りにおいて、いつも心引かれるもの。富や名誉や、仕事やレジャー。美味しい食事や、健康を保つことでさえも、地上のものであります。なぜなら死んだらもう関係がないからです。天国にもっていけないものであります。しかし、地上に生きている限り、そういった地上のものと、全く関係なく生きていくことなどはできません。しかし、どんなに保ち続けていたくとも、これら地上のものは、老いと共にはぎ取られていくのではないのでしょうか。しかし地上のものの全てをはぎ取られ、とうとう、死を迎えなければならないその時にも、決してはぎ取られないものがあります。それが、上にあるものです。上とは何か。それは、キリストのいますところです。それは神の国と言っても良いかもしれません。そこに、キリストが、私たちに与える命を保ち続けてくださっている。それはまだ隠されていて見えません。けれども神の御手のうちに確かに保たれている。わたしたちが死ぬということは、どこか暗い、未知なる世界をさまようのではなくってわたしたちを愛し、わたしたちに命を与えてくださるイエス様のところに行くのだということを、私たちはただ信仰によって受け止めて行きたいのです。そしてこのような天の命への希望は、若い頃には何度説明されても、本当の意味で心から希望することはなかなかできなかったと思います。なぜなら若い頃も、壮年の時代でも、地上のことで心が一杯で、自分がいずれ死ななければならないということなど深く受け止められなかったと思うのです。今すでに主イエスにあって死んだものであるという事実

さえ、忘れてしまっているかもしれません。しかしわたしたちが年を取るにつれて、老いの中で失っていく地上のものの代わりに、より一層はっきりしていくもの。わたしたちの内に生まれており、確かに息づいているものが、はっきりと浮き彫りにされていきます。それが天にある永遠の命の希望です。洗礼を受けた人は皆、この天にあるものを待ち望む心が与えられています。なぜなら、わたしたちは洗礼によってキリストと一つとなったからです。そして、このように主が将来において確かに与える約束をしてくださったものを待ち望むということは、地上のものに心を引かれないようにすることと一つなのです。地上のものに思い煩ってれば、それだけ、天上のものに対する希望が失われてしまうからです。しかし天上のものを希望する心が強ければ、それだけ地上のものへの執着が消えて行くからです。地上のもの。それは、わたしたちがその死ぬ時に一番願うような、できれば苦しまないで死にたいとか、孤独に死ぬのは嫌だとか、遺された家族のことや、やり残した仕事のこと。そのようなことさえも、やはり地上のものなのです。このような事柄への思い煩いさえ、お任せしてしまいなさいとパウロはわたしたちに語っております。なぜなら、わたしたちは十字架によって贖われた神の子ですから、神のものとされているのですから、神がわたしたちの人生に最後まで責任を取ってくださるからです。ですから、わたしたちがその人生の晩年に、死が間近に迫って来るような中で、なお自分の人生をどう終わらせようか、思い煩って、心が沈んでしまわないように、私たちはいつも祈るように促されているのです。聖書の御言葉の約束に立ち続け、十字架と復活の出来事を私たちに与えてくださったキリストを見上げて行く。そのようにして、わたしたちはこの地上で信仰生活を全うしていきたいのです。キリストの復活の命は、今日も私たちに聖霊を通して注がれ続けています。その力が、わたしたちを上に向けさせ、希望を絶やさないで続ける力なのです。聖書が伝える永遠の命の約束を日々、願い、求め続けること。それが私たちキリスト者の人生全体を貫くあり方であり、そこでこそ、死の思い煩いを克服する力が天から与えられていくのです。神が、真実であり、決して嘘をつかれない方であり、誠実な方であることを、主イエス・キリストを通して知らされたわたしたちは、疑うことなく上にある永遠の命を慕い求め続けていきたいのです。そこで、わたしたちは晩秋の寒空のような老いの時代にもなお、暖かい春が必ずやって来るのだということ。しかもその春は、永遠に続く春なのだということを感じて待ち望んでいきたいのです。そこからまたわたしたちの人生が、より確かなかたちで始まるのです。神を喜び、救われたことを喜び、命を喜び、栄光をあらわす。そのような日が必ず来ると待ち望んでいきたいと思えます。お祈りをいたします。

教会の頭であられる主イエス・キリストの父なる御神様。わたしたちに命を与えて下さり、長い人生を歩ませて下さり、洗礼を通して新しい命を与えてくださいました幸いを心から感謝いたします。これまでの歩みを導いて下さり、今も私たちと共にいてくださることを信頼いたします。どうか主よ、思い煩いを捨てて、ただ永遠の命を待ち望みつつ歩む者とさせてください。わたしたちの人生の全ての時が、あなたのものであり、あなたの御支配のもとに生かされていることを、日々の祈りの中で受け止めて行くことができますように。私たちの内に、永遠の命の希望を増し加えてくださいますように。死を恐れない心を。死の先にある神の国での新しい命を待ち望む心をお与えくださいますように。今週から始まります一週間を、主の霊に導かれて歩む者とさせてください。今日、この御堂に集うことのできない兄弟姉妹の上にも主が豊かに伴ってくださいますように。闘病中の方々に励まし、強めてくださいますように。苦しみを取り除き、深い癒しを注いでくださいますように。

ウクライナ情勢も半年を過ぎました。今なお続くこの状況に、あなたが深く介入してください。そこにたずさわる政治家、軍に属する人々にあなたの介入がありますように。正しい裁きが為されますように。コロナ禍の第七波もなかなか終息しない中で、罹患した人々を深く癒してくださいますように。また、これ以上罹患者が出ませんようにお願いいたします。この言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン